

LA LETTRE DU SENEGAL



アッサラーム・アライクム！ナンガデフ？

みなさんこんにちは！青年海外協力隊2023年度4次隊、青少年活動・松岡愛実です。セネガル共和国のバンベイという町で視学官事務所（教育委員会にあたる組織）に所属し、小学校図書室を拠点に子どもたちへの読書推進や図書室の運営を主な活動として行っていく予定です。

さて、セネガルに到着して約1ヶ月間は、セネガルの銀行口座開設や外国人登録などの身辺手続きに加え、首都ダカールの高等教育機関でフランス語とウォロフ語の語学訓練を約90時間履修しました。授業の一環で、かつて奴隷貿易で栄えた「ゴレ島」に行ったり、職人村や博物館に足を運ぶ機会もありました。セネガルの公用語はフランス語ですが、日常会話のほとんどはウォロフ語です。だからこそ「ウォロフ語をとにかく使ってみる」ことを意識して、普段の買い物でも積極的にウォロフ語を使い生活していました。タクシー運転手やマルシェのマダム、街で出会う人びとが先生かのようにウォロフ語を教えてくださいました。加えて、6月はイスラム教の大きな祭事「タバスキ（Tabaski）」がありました。今回は、語学訓練とタバスキについてご紹介しようと思います。

①涼しい木陰には自然と人が集まってくる。各々で椅子を持参しアタヤを飲んだりしている
②ゴレ島の奴隷の家。1階の収容スペースはわずかな光しか入らない
③アートの島でもあるゴレ島で見つけた可愛い作品
④色彩豊かな家や石造りの家が軒を連ね、散歩するだけでも楽しめるゴレ島
⑤ダカールで至福のジェラートタイム
⑥タバスキ中よく見かける荷台に載せられ運ばれるヒツジ
⑦警察署には短パンで入ることができない。そのためか周辺にはズボン商人がいて彼らから長ズボンを購入し無事入れた同期



松岡愛実（セネガル名はファトゥ・ンジャイ）。高知県出身。青年海外協力隊2023年度4次隊員。青少年活動で2024年5月からセネガル派遣中。首都ダカールから東に約130km離れた場所に位置する「Bambey（バンベイ）」の小学校図書室を拠点に、子どもたちへの読書アクティビティの推進と図書室の運営維持を主な活動として取り組む予定。食べ物を前にすると目が輝く。セネガル料理（通称セネ飯）がとにかく大好きな29歳。



タバスキってなに？

イスラム教で最大の祭日「イード・アル＝アドハー（犠牲祭）」をセネガルでは「タバスキ」と言います。今年は6月17日に行われました。朝早くからモスクへお祈りに行き、その後アッラーに生贄として捧げるため自宅で羊を屠殺します。余すことなく捌かれた肉は、「喜捨」として羊が買えなかった貧しい人々にも分け与えられます。羊肉を使った料理を家族みんなで食べ、新調した衣装を着てダンスしたり、宴は夜遅くまで続きます。この日のために、セネガルの街中ではたくさんの羊が売られていました。

格別に美味しい！タバスキの食事

羊を捌くのは男性のしごとで、女性は料理を担当します。無駄なく捌かれた羊は早速調理され、お昼は捌きたての羊を使った料理をいただきました。ジューシーで程よい噛み応えの羊肉…あまりの美味しさについつい食べすぎてしまい、胃もたれと闘っていました。いつの間にか羊肉の虜です。

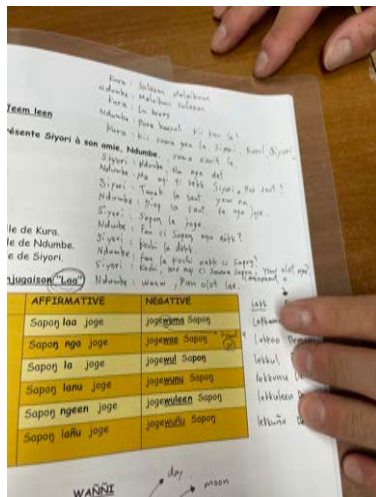


家族の健康と安全を願う日

ホストファミリーと一緒に彼女の実家や友人宅をまわり、たくさんの人に会いました。挨拶回りだけで50人ほど出会ったと思います。タバスキはどこか日本の年末年始のような雰囲気を感じました。ちなみに「ファトゥ・ンジャイ」の名は、ホストファミリーからいただきました！

語学訓練 と タバスキ

ウォロフ語でのあいさつ



ライクム」から始まり、「元気ですか？」「家族は元気？」「平和かい？」「贅沢してる？」「暑さはどうだ？」など、やりとりがとても多いし、そんなこと聞くの？という新鮮さもあります。さらには、立ち止まることなくすれ違いながら挨拶を交わしているシーンにもよく出くわします。一連の挨拶を終える頃には相手が数メートル後ろにいたりします。

今月のウォロフ語

▶▶ Na nga def?(ナングデフ) / 元気ですか？

例) —Na nga def?(ナングデフ?) / 元気ですか？

—Mangi fi rekk (マンギフィレック) / 元気です

現地語学習の第一歩は挨拶です。ウォロフ語はセネガルだけでなく、ガンビアやモーリタニアでも話されます。セネガル人の挨拶のフレーズがとても多いことに当初驚きました。「アッサラーム・ア

の世界遺産」とも呼ばれています。美しい景観をゆったりと散策できるため、現在は多くの人が訪れる観光スポットとなっています。ゴレ島「奴隷の家」は、2階に白人の管理人住居、1階に収容所という造りです。暗く冷たい収容所に男性、女性、子どもに分けて収容され、寒さに耐えきれず、亡くなる子どもも多かったと言います。伝染病にかかった人は生きたまま

海に投げ捨てられ、サメの餌食となりました。1ヶ月半に一度150～200人の奴隷が約2ヶ月半の航路を経て、ここゴレ島からブラジル経由でアメリカに運ばれたそうです。この扉を出た者は二度と、家族のもとに戻ることはできませんでした。



校外学習「ゴレ島」

外授業ではゴレ島にも足を運びました。ダカール港からフェリーで約40分の場所にあるこの島はかつて奴隷貿易で栄え「負

